

**感想1** ピウスツキが記録した樺太アイヌの歴史に光を！ 野間 令

故木村保和氏のご冥福をあらためて心よりお祈り申し上げます。遺骨返還の厚い壁を動かそうという大事な時に木村氏を失ったことは本当に大きな痛手です。木村氏がピウスツキやチュフサンマにみやげ話をたくさんもって逝ってくださることを願っています。



この日の講演では、国立民族博物館所属の田村氏がその講演の中で、何のために「エンチュ」ということばの由来を話そうとしたのか理解に苦しみました。研究者が教えを垂れる、というやり方が今でもまかり通ることに怒りを覚えます。

エンチュ末裔にとっては子どもたちにアイヌのことは何も教えようとしなかった大人たちの会話から、子ども心に残ったアイヌ語「エンチュ」はお互いを呼び合う自称でした。そして残された大事な樺太アイヌ語です。学説ではなく現在に生きていることばです。

「エンチュというのは河野広道が勝手に言っている」などと握造するのは、当事者の声を尊重できない身勝手な研究者の言い訳だと思います。墓標の共通性はそこにその墓標を受け継いできた人々の生活と歴史の痕跡がある、ということに違いありません。「樺太アイヌ」とか「北海道アイヌ」とか地域を限定しようとするから見えてこない。樺太だけではないエンチュの生活、歴史の領域をのびのびと広げてみていきたい。「樺太」アイヌという必要はない、アイヌでいいんだ、と言う声が聞こえてきそうです。

自分の先入観と合わないことを否定する前に、

当事者の声と向き合って欲しい。田村氏は過去にも何度も田澤に抗議を受けながら、自らの主張に固執する稀有の人に見えます。そこにエンチュへの侮蔑の表情を見てしまうのは私だけでしょうか。

エンチュ協会会長田澤はその世代では、親やばあちゃんから直接樺太のことを聞き取って、そのアイヌの精神を受け継いでいこうとする稀有の人です。ピウスツキ研究者の井上絃一先生の支援を受けてエンチュ協会が設立されてから24年も経とうとしています。会長田澤の訴えとその人柄が理解されるようになってきました。=上写真=

もう一つ、皆さんに知って欲しいことがあります。樺太から持ち去られて日本各地の帝国大学に研究用として保管され続けてきたエンチュの遺骨は、未だ各大学で管理されています。故木村氏とご縁のある遺骨も同様に留め置かれています。エンチュの遺骨は樺太へ帰還し、土に還されることをめざしています。誤解や偏見を排して、遺骨がふるさとに還ることを支持していただけますよう、心からお願います。(のま・れい、エンチュ協会賛助会員)

**感想2** Pilsudskiana の裾野拡大を 井上 絃一

「プロニスワフ・ピウスツキに関する総合研究」（私は同研究領域を“Pilsudskiana”と命名するよう呼びかけています）に従事する我々は概ね、ピウスツキ本人並びに彼の仕事の究明に特化して各自の研究を進めてきました。

その結果、彼が人類学者としてサハリンや北海道で実践したフィールドワークの成果はかなり解明できたものの、ピウスツキと「同じ立場」からアイヌの文化・歴史を追求する作業は大幅に立ち遅れています。

北海道ポーランド文化協会が今般、この課題と果敢に取り組まれたことを高く評価します。

第2次大戦後、父祖の島を去って日本への移住を強いられたエンチュ（樺太アイヌ）の人々は概ね、アイヌ差別を回避するべくエンチュ出自を秘匿して「日本人になる道」を選択し、その言語や文化の伝承は中断されました。それでも在日2世の田澤守さんたちは2001年、失われたエンチュ・アイデンティティの再生を求めて樺太アイヌ協会を創設しました。2018年にはエンチュ遺族会を別途に立ち上げ、国内外の諸機関が収蔵するエンチュ遺骨の返還運動

にも邁進しておられます。

したがって、佐々木史郎、田村将人両氏のプレゼンへ、田澤守さんが激しい反応を示したのも理解できます。彼はきっと、議論を受け止めてもらえそうな研究者との巡り会いに励起されたのでしょう。しかも両氏は田澤さんを対等な相手としつつ、沈着丁寧な応答に終始されました。

この状況はピウスツキとインフォーマントの関係性を彷彿させます。このような出会いの場が今回限りではなく、今後とも頻繁に設営されるよう願ってやみません。もしそれが成就するならば、Pilsudskiana はその裾野を大きく拓けることになるでしょう。

(いのうえ・こういち、北海道大学名誉教授、本会会員)

=写真= (奥)井上絃一、(手前)小笠原正明



## 感想 3

## 歴史の事実はどこにあるのか 池田 裕子

春の訪れを感じさせるような前日から、打って変わって冬に逆戻りしたかのような2023年3月4日(土)、北海道ポーランド文化協会主催の特別講演会「プロニスワフ・ピウスツキの遺したもの」に参加した。当日は久しぶりの対面開催ということもあり、70人ほどが集まっていた。

ピウスツキとは、サハリン島に政治犯として送られた経験を有するロシア帝国生まれのポーランド系民族学者である。島では先住民らと交流し、「識字学校」を開いた。刑期満了で退島後、1902～05年にかけてロシア帝室科学アカデミーの委嘱によりサハリン先住民の文化や言語の調査を行った。講演会は当時の先住民らとピウスツキとの交流の一部を紹介する内容であった。

第一報告では、そのコレクションから浮かびあがるアイヌの繊維製品に見られる高い技術やセンス、そして何よりも島が多様な文化交流の拠点だったことを示す資料が紹介された。先住民たちの生活民具は彼らの家族に対する愛情を鮮やかに残す。普段、文献資料にばかり注目している筆者にとって、それは新たな眼が開かれた思いがした。

第二報告では、ピウスツキとの交流が深かったアイヌ民族に焦点を当て、大国のなかでもとりわけ影響の強かった日本に翻弄された歴史を繙いた。講演は、ピウスツキのサハリン滞在が先住民らに及ぼした影響の大きさを改めて確認する機会になった。

事後、報告で言及された「エンチウ」(樺太アイヌ語に古くからある「人」を意味する雅語で、現在は樺太アイヌにルーツのある人々が自称として用いている)という言葉に関して、当事者の認識や実感とのずれについての質問があった。この言葉の研究上の歩みについては、20世紀前半に金田一京助が語源を問い、河野広道が調査の過程で使用した後、それが誤解を生みつつ受け取られているとの指摘がある。他方で日常語としてのエンチウの使われ方

の歴史については、幾つかの報告はあるものの、詳細はわかっていない<sup>i)</sup>。

歴史をテーマに選んだ研究者は、その分野の先行研究とどのように対峙するのか、その際、自らの依拠する資料をどのように選び、用いるのかという問いと常に向き合っている。そうした問いから出発し、学術的検証を経て確定し得る歴史の事実を、言葉を尽くして伝えていくことが求められる。

日本領の南樺太には、領有初期を除いて9割を超える内地人(ヤマト系住民)のほか、アイヌ、ウイラタ、ニヴフ、エヴェンキ、ウリチ、サハなどの北方諸民族、そして時期にもよるが、「満洲国」人、中華民国人、旧露国人、ポーランド人、ドイツ人、トルコ人などの外国人がマイノリティとして暮らしていた。しかし当時の樺太社会には、彼らに対する尊重と共生の論理は存在していなかった<sup>ii)</sup>。

これからの日本社会においては、多様な民族的背景をもつ人々が、一人ひとりの人間同士として尊重し合い、ともに生きる社会を作ることが重要である。そのためには、当事者はもちろんのことだが、今回のような学びと交流の場に足を運ばない人々にも広く共有し得る歴史像の構築が課題であるというメッセージを受け取った、得がたい時間であった。

(いけだ・ゆうこ、東海大学教授)

<sup>i)</sup> 児島恭子『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史の変遷—』吉川弘文館、2003年、113頁

<sup>ii)</sup> 池田裕子「樺太のマイノリティはどう生きたのか」『歴史評論』857号、2021年、30～31、39頁

## 感想 4

## エンチウはどこから来て、どこへ向かったか 小笠原 正明

今回の講演会は一見荒れたような印象がありますが、見方によっては望ましい展開だったように思います。佐々木先生は、織物を通して樺太アイヌの存在感を示しました。田村先生には、近代における樺太アイヌ研究の成果を分かりやすく説明していただきました。学問ですから、定義された用語でデータやモノを根拠に議論せざるを得ないわけで、その条件のもとでなすべきことをなしたと思います。

その一方で、講演会の最後で爆発したエンチウ代表田澤守さんの、行き場のない怒りも理解しなければならぬと思います。客体として、つまり研究の対象としたときの見方と、主体として、つまりかつてそこに住み今も所を変えて生き続けている者としての見方は自ずから違うということです。そもそもエ

ンチウの代表者は現在一般に通用している「樺太アイヌ」の概念を受け入れていないように感じられました。これは重要な問題です。

このギャップは大きすぎて容易に越えられないとしても、時代区分ごとに高度に専門分化する前に、「エンチウ」を主体とし、時間軸を長くとって見直し

てみれば、新しい視界が開けるかも知れません。

西エンチュウの故地と考えられるサハリン南部の西海岸は謎に満ちた地域です。オホーツク文化の専門家は、この地域を、オホーツク文化南下の根拠地だと同定しています。土器型式でいうと鈴谷式文化人の櫛目文グループが重要です。同地域の先住者縄目文グループは縄文の直系ですが、こちらの方は大陸起源です。この人たちは高度に発達した漁撈技術を持つ海洋民で、宗谷海峡を経てオホーツク沿岸に移動してオホーツク文化を広げたとされています。この民族はニヴフともウリチとも言われていますが、仮にその人たちも西エンチュウと呼ぶとしたらどうなるのでしょうか？

これまでの北海道考古学では、オホーツク文化のみ注目されて、日本海沿岸を南下して利尻・礼文、天売・焼尻を経由して石狩湾、余市に向かった人たちのことはなぜか無視されています。これはオホーツク文化期においても、その前でも後でも起こり得ることです。北海道のオホーツク海沿岸は冬季に流水でとざされ漁撈活動は制限されますので、海洋民にとってはむしろ日本海側の方が魅力的だったはずで、このルートで相当数のエンチュウが移動し、在地勢力と混血して後にアイヌとされていた可能性があります。河野本道先生も、西エンチュウの墓標は青森県是川でも発見されていると書いています<sup>1)</sup>。余市や天塩のアイヌが自分たちを西エンチュウ

だと思っているのは不思議でも何でもありません。

10年以上前、私たちが取り組んだ琥珀平玉の産地分析の結果からも、すでに紀元前後に似たような流れがあったことが示されています<sup>2)</sup>。それを担った人々をエンチュウと呼ぶことはできないとしても、2千年も前から人々は宗谷海峡などものともせず、行ったり来たりしていたことは確かです。縄文文化は日本固有の偉大な文化でサハリンにも及んだが、その逆の流れはありえないという不思議な考え方をする人が大勢います。しかし、最近では、北海道において縄文文化に続く「続縄文文化」の時代に「生業」の転換があった、つまり生活のうえで縄文と続縄文の間には大きな違いがあったことが注目されつつあります。そのような変化を引き起こした人々は学術用語として定義されている「樺太アイヌ」ではあり得ないにしても、「エンチュウ」ではあったかも知れません。

田澤さんの怒りは西エンチュウの存在が(あるいはその名前さえも)無視されていたことに向けられていると思います。この特別講演会もこの発言でバランスが取れたと感じました。

(おがさわら・まさあき、北海道大学名誉教授、本会会員)

<sup>1)</sup> 河野本道著、「アイヌ」-その再認識～歴史人類学的考察、北海道出版企画センター、1999.11

<sup>2)</sup> 小笠原正明; 原奈々絵、北海道の続縄文遺跡から出土した琥珀製平玉の産地同定とその流通、日本文化財科学会誌(84), 37-57, 2022

報告

特別講演会では、白老町・国立アイヌ民族博物館の

①佐々木史郎館長が「プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類」、②田村将人資料情報室長が「ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み」と題して講演されました。

参加者は70人を超え、情報豊富な講演のあと、エンチュウ協会の田澤守会長や井上絃一北大名誉教授らも発言し、熱い討論が行われました。



=上写真=左から 長田佳宏平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長(司会)、田村、坂本、佐々木、安藤、熊谷敬子(企画担当)=尾形秀秀撮影=

2023 3/4 (土) 18:30~20:30 札幌エルプラザ 4F 大ホール (定員400名)

毎年プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催してきました。近年、今年は特別展「アイヌ」の開催にあたり、アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。この展覧会では、アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

講演1: アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

講演2: アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

入場料: 1,000円 (学生半額)

申込先: 国立アイヌ民族博物館 企画課 011-261-2111

講演会では、アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

講演1: アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

講演2: アイヌ文化の発展に貢献した人物として、アイヌ・プロニスワフ・ピウスツキの展覧会を開催いたします。

=左図=チラシ表/裏

講演会に先立ち、寄付金贈呈式が行われ、坂本純一郎氏から安藤厚会長に目録(50万円)が手渡されました。



=右写真=

## 寄付を終えて～パスを繋ぎ、未来を共に編んでゆく 坂本 純一郎

毎年十一月の東京の隠れた風物詩、「ポーランド映画祭」。主宰者、小倉聖子さん(VALERIA 代表)には数年前に企画したあるイベントでご登壇頂き、特長ある映画作品群の解説に留まらず、映画祭主宰に至る私的人生の道程を振り返って頂いた。また、ご主人のコモロフスキ・マチェイさんにはポーランド伝統料理のレシピをご提供いただいた。

この出会いの後、小倉さんの SNS 上の投稿から、北海道ではポーランドとの文化交流を行う市民団体と「アイヌの人々」との交流が盛んらしいと知った。

2019年には幸運にも、日ポ国交樹立百周年記念エッセイコンテスト\*で入賞した。そこではヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日大使の創作演劇『祖霊祭 DZIADY』について熱心に綴る青年もいた。当時は興味を持てなかったが、数年後にふと読み始めて驚き、その後、何度も読み返すことになった。

先住民族アイヌの人々との数奇なご縁、そしてポーランドの祖霊祭への素朴な驚きが、貴会への寄付実現に至る確かな手掛りとなっていった。

さて多大な労力を掛けて、なぜ寄付するのか？ 私が(ポーランド以外に)中国とも縁が深いことが理由の一つである。孫文の辛亥革命で中華民国が誕生する前後に、革命を経済的に支援し続けた梅屋庄吉の生き様に影響を受け、さらに曾孫の小坂文乃さんが現代もその史実を日中の次世代へ地道に伝え続けている姿を知り、私自身も彼女と出会い魂が震えたことを鮮やかに思い出す。

社会人となり北海道を出て三十有余年。いずれ故郷にも貢献できたらと思案していた矢先でもあった。社会貢献のさまざまな形と故郷への想い。こう書けば、この寄付が初めから約束された取組と映ってしまうかも知れない。

そこで、細やかながら私の物語を語りたい。今回は、株式会社三菱 UFJ 銀行の『役職員が企画実施する社会貢献活動』の取組への5回目の入選だった。

これまで、日ポ間の貴重な歴史的事実を調査した学術書(『ポーランド児童救済事業の記録』2021)の出版費用、全国優勝の若手ピアニストを海外(ポーランド)マスタークラスへ派遣、そして(コロナ禍の緊急事態宣言により露と消えたが)ある外国語大学へマイナー言語による司法通訳の共同研究への助成等、さまざまな取組を協働し、喜んでいただけた。

しかし、前回初めて苦杯をなめた。ある芸術家の大作の保全維持活動へ寄付する提案が、作品テーマの政治性を指摘され、銀行の社会性の観点からも、風評被害の懸念ありとして却下された。

最終締切日が二週間後に迫り、天を仰いだ。その時、ふと貴会の名前が浮かんだ。それまでは優先順位が低くなっていたが、まるで北へ行くと見えない力で後押しされた感覚を覚えた。

だが、試練は続く。締切前日に提出した提案が、結果発表の二日前にまたもや却下されたのだ。信じ難いことに、当初の本部担当者は翌日から長期休暇に入ってしまった。最早ロスタイムも無いのか。

一人もがいていたその時、日本社会はサッカーW杯での日本代表チームの躍進に大きく沸いていた。「三苦の一ミリ」と呼ばれ息詰まるVAR判定となった究極のプレーが世界の注目を集め、賞賛されていた。——光が見えた。

正直にいう。私は賞賛は要らないが、「坂本の一ミリ」が本部との駆引きを制したことを知ってほしい。零円から満額獲得までの逆転劇は、魂を込めた攻防の帰結だった。その後の一か月にわたる延長戦で、一ミリに賭けた強い意志が、会員諸氏の文化継承者としての矜持に火をつけたなら、大変うれしい。

北の大地でポーランドとの交流に貢献されてきた貴会が、グローバルな視座とアイヌ民族との共生から得た知見を、ダイバーシティの確かな歩みのためにご提言され続けることを切に願っている。

(さかもと・じゅんいちろう、三菱 UFJ 銀行)

(謝辞)本講演会は株式会社三菱UFJ銀行様より社会貢献活動の一環として50万円のご寄付を頂き、その一部を活用して実現しました。他にも、ポーランド及びアイヌ文化に関する書籍・映像資料等を中心に充実させていただきました。篤く御礼申し上げます。(会長 安藤厚)



発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方

TEL・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com

東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付

TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会

安藤厚／新井藤子

池田光良／氏間多伊子

熊谷敬子／松山敏

